

## 名誉会員 山下英男先生を偲ぶ

和田 弘†

本会初代会長、名誉会員である日本学士院会員、東京大学名誉教授山下英男先生は去る5月25日大往生をとげられました。多方面に亘る足跡の中から情報処理の分野に限って、先生の業績の一端を振り返ってみたい。

1936年アメリカ M. I. T. から戻られた先生の担当の科目は電気機器であったが、研究の方は Shannon の影響からか計算機の方面に向けられ、統計機の研究試作に着手された。資材不足の時代であったので、戦後放出された継電器を集めるなどの苦勞があって、1948年に山下式統計機と呼ばれて実用できるものができ、計算センタとしての役目を果たした。但しプログラムは配線によったから自動計算機ではなかった。

ENIAC などいくつかの計算機が稼動し始めた1951年に、ユネスコは国際的な共同計算センタ (ICC)\* を設立するための条約会議を開いた。先生はわが国を代表する技術顧問として出席され、その帰途日本人としては最初に欧米の計算機の実情を視察された。その後計算機が発達したのでこの共同計算センタの構想は実現しなかったが、条約によって ICC はしばらく存在し、先生はその理事として勤められた。

この条約会議に刺激されて東京大学で大型計算機の試作研究が始められることとなり、先生を中心として TAC が作られた。電子管によるものだったので信頼性に乏しく、1959年に完成したが

短命に終わった。

ユネスコは1957年アメリカの提唱に応じて、1959年6月“情報処理”についての国際会議を開催した。わが国からは論文4件が発表され、また展示会にトランジスタ計算機、パラメトロン計算機が出品されて認識を新たにされ、先生はパリ市民賞を受けた5人の中に加えられた。



この期間中に IFIP\* を組織してはとの提案がアメリカから出された。わが国はこれに呼応して国内組織として本学会を創設することとし、電子工業振興協会の協力を得て、翌1960年の創立総会となり、先生は初代会長に推挙されその基礎を確立された。

学会は現在情報規格調査会で情報技術分野での国際標準化を担当しているが、先生はその前身の初代委員長でもあった。

先生は若い頃から美男子との評判が高く、スマートであり達筆家でもあった。宴席での踊りなども堂に入ったもので、国際会議での余興として披露されたり、手品の種を持参されるなどの心くばりをしておられた。

晩年、夫人を失われてから気落ちされたようにお見受けしたが、自宅での生活を通された。女婿元岡教授が亡くなられてからは一入その感が深かった。1899年のご出生であることから、平素「3世紀に亘って生きたい」と語っておられたが、かなわず、94才で安らかに逝かれた。

ご冥福を祈って筆を擱く。

† 成蹊大学名誉教授

\* International Computation Centre

\* International Federation for Information Processing